HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	千島アイヌ民族へのロシア正教会による宣教活動 : 露米会社植民地時代を中心に
Author(s)	山崎, ひとみ
Citation	スラヴ研究, 71, 55-76
Issue Date	2024-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/SlSt.71.55
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93598
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_Yamazaki_Hitomi_Slavic-Studies_71.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[研究ノート]

千島アイヌ民族への ロシア正教会による宣教活動

—— 露米会社植民地時代を中心に ——

山　崎　ひとみ

はじめに

本稿は、千島列島が露米会社の植民地となっていた時代における、当列島の先住民千島アイヌ民族へのロシア正教会による宣教の状況を明らかにしたものである。本稿が扱う時代は年号に置き換えると、露米会社の組織として千島列島局（Курильский отдел）が正式に発足した 1831 年から [1]、露米会社解散前の 1860 年代までが中心となる。（千島列島局は 1845 年に事実上廃止されたが、その後も 1867 年の解散に至るまで露米会社の植民地であった）[2]。

サハリンの考古学・歴史学者ヴァレーリー・シュービンの研究にならい、露米会社が千島列島を毛皮狩猟業の拠点のひとつとしていたという意味で、この時代の千島列島を露米会社の「植民地」と呼ぶことにする。

千島アイヌ民族への宣教の歴史は、1875 年の千島樺太交換条約を境に大きく二つに分けることができる。前半は、彼らが北千島を中心とする千島列島に居住していたという意味で千島列島時代と呼び、後半は、千島樺太交換条約締結から 9 年後の 1884 年に全員が色丹島へ移住させられ、以後当該地に居住していたという意味で色丹島時代と呼ぶことができる。この大きく分けた前半の千島列島時代のなかで、露米会社による植民地時代は、あらゆる点において突出した時代であった。シュービンは、この植民地時代を指して「クリル列島がロシアによって開発された時期において、最も華やかで躍動的な時期のひとつであったことは疑いない」[3] と述べている。このことは、他の時代に比べて資料が豊富にあることを意味し、千島アイヌ民族がおかれた生活環境や教会との関わりに焦点を当てて調査することを可能にしている。

千島アイヌ民族への正教宣教は 18 世紀前半に始まっており、「1800 年時点での全受洗者は男性 77 名、女性 87 名であった」[4]。当時、ロシア正教会最東端の教区はイルクーツク教区であったが、その管轄範囲がカムチャッカ、千島列島、アリューシャン列島、ロシア領アメリカに拡大するに及び、1840 年に「カムチャッカ教区」[5] が独立する形で新設され、当教区

1　*Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах // Краеведческий бюллетень. 1992. №3. С. 39.

2　Там же. С. 54–55.

3　Там же. С. 56.

4　*Полонский А.* Курилы. СПб., 1871. С. 19.

5　Камчатская епархия // Православная Богословская Энциклопедия［https://azbyka.ru/otechnik/Lopuhin/

主教は「カムチャッカ、クリル及びアレウトの主教」[6] という称号（титул）で呼ばれることとなった。ロシア正教会史上初めて主教品の称号の中に「クリル」[7] の名が記されたことからも、この地域への注目度が高まったことが分かる。同年には、千島列島最北端のシュムシュ島に会堂が建立されている[8]。当教区の初代主教となったインノケンティ（ヴェニアミノフ）[9] は、後の 1868 年にモスクワ及びコロムナの府主教となり[10]、永眠後の 1977 年にロシア正教会及びアメリカ正教会において「シベリア及びアメリカの使徒」として列聖されている[11]。同時期に千島列島の宣教を行なった司祭（後に長司祭）イアコフ・ニェツヴェトフは、インノケンティ（ヴェニアミノフ）主教配下の司祭で、永眠後の 1994 年にアメリカ正教会において「アラスカ諸民族の光照者」として列聖されている[12]。後に列聖された聖職者が二人も宣教に携わっていたという環境は、千島列島史上この時代だけであり、これひとつをとっても、この時代を「突出した時代」と名付けることを可能にしている。

以下、本稿では第 1 節「露米会社設立以前の宣教の概況」において、カムチャッカ、千島列島、アリューシャン列島、アメリカ北西部への探検家、商人らの進出、ロシア正教会による初期宣教について述べる。この時期において注目されるのは、露米会社の先駆となったシェリホフ＝ゴリコフ会社の経営方針に見る先住民のキリスト教化の理念である。この理念は、その後、アメリカ合同会社を経て、露米会社へと引き継がれていく。第 2 節では、「露米会社植民地時代の千島アイヌ民族の生活環境」を概観する。第 3 節「千島アイヌ民族の所属教会」では、千島列島には信徒の共同体単位としての教会という組織（приход）は存在せず、千島アイヌは宣教初期においてはカムチャッカのボリシェレツクの教会に所属

pravoslavnaja-bogoslovskaja-entsiklopedija-ili-bogoslovskij-entsiklopedicheskij-slovar-tom-8-kalendar-biblejsko-evrejskij-i-iudejskij-karmanov-d-i/76］(2023 年 8 月 28 日閲覧).

6 当初、シノド（宗務院）は、この新設教区の主教の称号を「北アメリカ及びカムチャッカの主教」と考えていたが、ニコライ一世は「カムチャッカ、クリル及びアレウトの主教」とするよう命じた。宗務総監が「陛下、クリルには教会がひとつもございません」と申し上げると、ニコライ一世は「建てよ」と応じた。*Барсуков И.* Иннокентий, митрополит Московский и Коломенский, по его сочинениям, письмам и разсказам современников. М., 1883. С. 125–126.

7 「クリル列島」（Курильские острова）と「千島列島」は一致しない部分があるが、本稿では第十八島（ウルップ島）以北を扱っており、この地域に関しては「クリル列島」と「千島列島」は一致しているため、本稿では「千島列島」を用いる。また、先住民族については「千島アイヌ」を用いる。諸文献からの引用は、原文のままとする。また、アレウトはアリューシャン列島を指す。

8 *Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С.52; *Шубин В.О.* Миссионерская деятельность сподвижника И.Е. Вениаминова священника Якова Нецветова на Курильских островах // Вестник Сахалинского Музея. 1999. №6. С. 154. 1840 年の時点で、露米会社植民地には教会が四つ（ノヴォ・アルハンゲリスク、パヴロフスク湾〔コディアク島〕、ウナラシュカ島、アトカ島）あり、八つの島に会堂があり、司祭は四名であった。*Федорова С.Г.* Русское население Аляски и Калифорнии конец XVIII века–1867 г. М., 1971. С . 237.

9 聖職者の名前の表記は、ロシア正教会の伝統に倣い、修道士の場合「修道名（苗字）」〔例：インノケンティ（ヴェニアミノフ）〕とし、修道士ではない場合「聖名・苗字」〔例：イアコフ・ニェツヴェトフ〕とした。

10 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем в 7 томах / Под ред. прот. Владимира Силовьёва. М., 2012–2015. Т. 1–2. С. 69.

11 Там же. С. 83–84.

12 Там же. С. 34.

しており、1836 年よりアリューシャン列島中部に位置するアトカ島聖ニコライ教会所属となり、1842 年よりロシア領アメリカの主要都市ノヴォ・アルハンゲリスク（シトカ）の教会に所属していたことを示す。第 4 節「『カムチャッカ教区』と露米会社」では、教区と露米会社との関係、特に初代主教インノケンティ（ヴェニアミノフ）が果たした役割及び彼の経歴について述べる。第 5 節「シュムシュ島の会堂」では、シュービンが「この辺境の地におけるキリスト教化史上もっとも顕著なできごとであった」[13] と評している 1840 年の会堂建立について詳述する。第 6 節「千島列島への司祭巡回の状況」では、本稿が扱う時代において、千島列島にいつ、誰が巡回訪問したのか、研究文献や史料の情報を時系列で並べ、巡回訪問の頻度を検証する。さらに、露米会社解散時の宣教の状況について触れる。

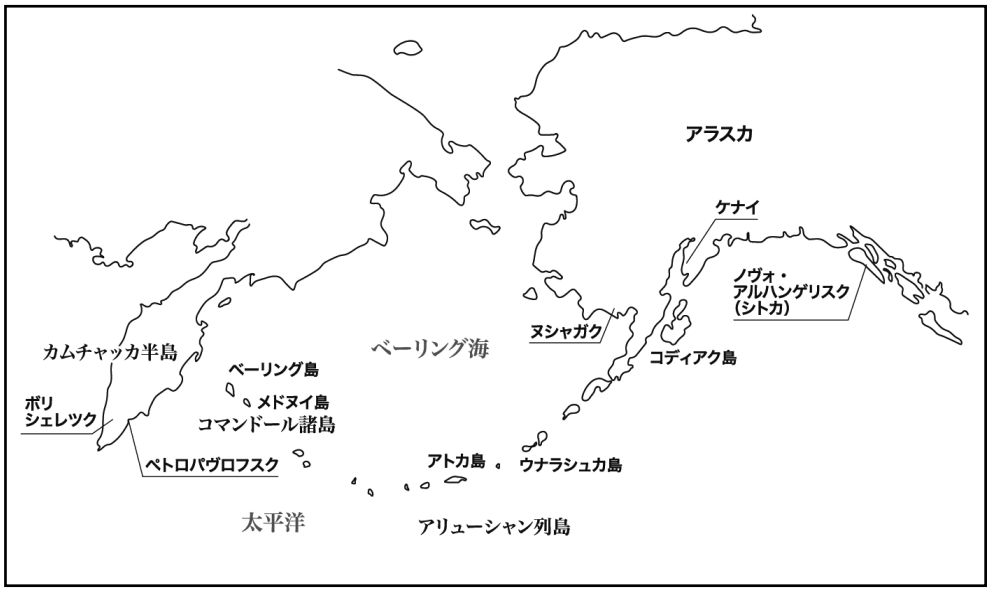


図 1　カムチャッカ半島、アリューシャン列島及びロシア領アメリカ地図 [14]

13 *Шубин В.О.* Миссионерская деятельность сподвижника И.Е. Вениаминова священника Якова Нецветова на Курильских островах. С. 154.

14 ヴァレーリー・シュービン（醍醐龍馬、兎内勇津流共訳）「1867 年から 1877 年にかけてのクリル諸島」『人文研究』第 145 輯、2023 年、21 頁、図 1 より、筆者作成。



図 2　千島列島地図 [15]

1. 露米会社設立以前の宣教の概況

まず、露米会社が設立される 1799 年以前のカムチャッカ、千島列島、アリューシャン列島、アメリカ北西部における宣教の概況を見ておきたい。

当該地域において、当初先住民に洗礼を施したのは司祭ではなく、ロシア正教徒であった船乗り、探検隊、毛皮狩猟者、商人たちであった [16]。

千島列島方面において先住民に最初の洗礼を施したのは、1734 年、ヤサーク（毛皮税）徴収の目的で千島列島第二島（パラムシル島）を訪れたヤクーツクの貴族マトヴェイ・ノヴォグラブレンヌィであった。また、1738–1742 年に組織された日本探検隊（Японская экспедиция）[17] が、第一島（シュムシュ島）及び第二島において、多くの島民に洗礼を授けた [18]。千島列島に渡った最初のロシア正教会宣教団は、1745 年にカムチャッカに到着した掌

15　同上。22 頁、図 2 より、筆者作成。

16　История Русской Америки 1732–1867 в 3 томах / Под ред. Н.Н. Болховитинова. Т. 1. М., 1997. С. 251–256.

17「南方探検部隊（Экспедиция южного отряда）」とも呼ばれる。千島列島の調査と日本との国交・交易の可能性を模索することが目的であった。

18　*Полонский А.* Курилы. С. 17. 洗礼を受けた千島アイヌは、聖名（せいな）（クリスチャン・ネーム）を得ると同時に、代父（だいふ）（洗礼機密の保証人であり、受洗者を正しい信仰生活に導く役割がある）の姓を名乗るようになった。このようにして、千島列島にシュパンベルク（Шпанберг）、ストロジョフ

院イオアサフ（ホトゥンツエフスキー）を団長とする宣教団である。（この宣教団の修道司祭イオアサフが千島列島に渡ったのは 1747 年のことであるが、カムチャッカの司祭たちは、これ以前に既に個人として千島列島に渡っている）[19]。

一方、アリューシャン列島及びアメリカ北西部方面に渡った最初のロシア正教会宣教団は、1794 年にコディアク島に到着した掌院イオアサフ（ボロトフ）を団長とする宣教団（アラスカ宣教団）である。この宣教団派遣のきっかけは、当時アリューシャン列島とアラスカで毛皮狩猟会社（露米会社の先駆的存在）を経営していたグリゴリイ・シェリホフとイワン・ゴリコフが、サンクトペテルブルクの府主教ガヴリイルに司祭派遣と教会建設を要請したことにある[20]。彼らは、その見返りとして、司祭の俸給、教会建設費及び維持費を負担することを約束した。それ以前にすでにシェリホフは、1784 年に自らコディアク島に上陸してロシア人居留地を築いており[21]、そこで率先して先住民への宣教を行い、洗礼を授けていた[22]。このように、アリューシャン列島では、ロシア人の進出と共に、民間人による正教宣教が進んでいたのである。先住民を奴隷のように酷使する毛皮狩猟者や商人たちがいた一方、シェリホフとゴリコフにように、先住民が自分たちと同じ信仰を持つことによって、共通認識を得ることが容易となり、安定した統治が実現できるとして、北太平洋地域にキリスト教を広めようとする人たちもいた[23]。この先住民キリスト教化の理念は、1781 年 8 月 17 日に調印されたシェリホフ＝ゴリコフ会社設立の合意文書（соглашение）に示されていたと推察される。なぜならば、後の 1798 年 8 月 3 日、イルクーツクにおいて調印された定款（акт）によって設立されたアメリカ合同会社の社則につぎのようなことが定められているからである。「かつて 1781 年より、著名なルィリスク市民シェリホフ及びクルスク市民ゴリコフの尽力によって定められたとおり、北西・北アメリカ、アリューシャン列島、クリル列島、及び太平洋北部への航行を発展し確立する」ことを会社の課題とし、「真のキリスト教である正教をアメリカ及び諸島の未洗礼の先住民の間に」宣教することを忠実なロシア臣民である商人としての義務とする、と。従って、すべての経営活動は誠意と人類愛を規範とするものでなければならなかったのである[24]。

（Сторожев）、ノヴォグラブレンヌィ（Новограбленный）、ソロヴィヨフ（Соловьев）などが現れた。Там же. С. 14–15. 彼らはこの姓を色丹島移住後の姓名改称（1911 年）まで用い続けた。根室聖母誕生教会のメトリカ（1903 年）に、色丹島の斜古丹教会の信徒として「チェルニク」（筆者注：元は Черных であったと推察される）、「ノボクラキン」（筆者注：元は Новограбленный であったと推察される）の名が記されている。（斜古丹教会のメトリカは、第二次世界大戦後行方不明）。

19 Там же. С. 18. 北太平洋地域全般に言えることであるが、民間人（船乗り、探検隊、毛皮狩猟者、商人など）が司祭の代わりに行うことができる洗礼は、奉神礼規則において部分的なものであるため、後に司祭が渡航した際、傅膏機密（таинство миропомазания）を行い、洗礼を完結させていたと推察される。文献においてこれを確認できるものとして、アレクサンドル・ポロンスキーの著書に、カムチャッカの司祭エルモライ・イワノフとヴォルコフが 1746 年、それまでに既に洗礼を受けていた千島アイヌ信徒たちに傅膏機密を授けたと記されている。Там же.

20 История Русской Америки. Т. 1. С. 256.

21 Там же. С. 118–131.

22 Там же. С. 256.

23 Там же. С. 110–111.

24 Там же. С. 337–338.

この定款の諸条項は、1799 年 7 月 8 日に発布されたパーヴェルⅠ世の勅令により設立された露米会社の社則に引き継がれ[25]、その理念に則って、後で見るように（本稿第 4 節「『カムチャッカ教区』と露米会社」）、植民地における宣教活動費は主として露米会社が負担するようになった。つまり、18 世紀 80 年代のシェリホフ＝ゴリコフ会社の経営理念としての先住民キリスト教化が源泉となり、後の露米会社と「カムチャッカ教区」との協働関係に繋がっていくという流れがあったと考えられる。

ここで、シェリホフの出自について触れておこう。シェリホフは「由緒ある商家の出身で、代々教会へ多くの寄進をしてきた家柄」であり、「彼にとってロシア人居留地に教会や司祭がいないということは考えられないことだった」[26]。この記述は、シェリホフ家の家紋の図柄[27]を想起させる。そこには二つの十字架があしらわれた盾、錨などが描かれると共に、「信仰と熱心を以って（верою и усердием）」という家訓が書き込まれている。

先住民へのキリスト教宣教は、祈祷の言葉を理解するための言語教育を伴い、彼らは次第にロシア語を理解し、話すようになっていった。

また、これらの地域の開拓・植民地化のために使われた数々の船の名称（「聖ガヴリイル」号、「聖パウェル」号、「聖天使ミハイル」号、「聖大致命女エカテリーナ」号など）からは、この事業に正教の理念と伝統が反映されていることが分かる[28]。

ここで付け加えておくべきことは、前述したアラスカ宣教団（1794 年派遣）は、悲惨な試練を被ることとなった、という点である。この時代、当地で蔓延していた毛皮狩猟人たちやシェリホフ＝ゴリコフ会社現地支配人アレクサンドル・バラノフのライフスタイルは、宣教団が説くキリスト教のモラルと真っ向から反対するものであった。当地では暴飲、一夫多妻、先住民からの搾取が横行していた[29]。そのため、宣教団が先住民に洗礼を授け、キリスト教的精神を教導することは、バラノフをはじめとする毛皮狩猟人たちにとって不都合なことであった。彼らは教会の建設を妨害し、また、先住民が宣教団に近づかないように仕向けた。1794 年から 1795 年にかけての冬、食糧が与えられなかった宣教団は、二匹の犬を食べるに至った。宣教団とバラノフとの間に生じた軋轢については、『ロシア領アメリカ史（История Русской Америки）』の第一巻第七章「ノーヴィ・ヴァラアムへの道：アラスカにおけるロシア正教会の形成（Путь на Новый Валаам: становление русской православной церкви на Аляске）」[30]に詳しい。迫害とも言えるバラノフの暴挙と宣教団の惨状は、パーヴェルⅠ世の耳にも届いたのであるが、アラスカ宣教団が皇帝（エカテリーナⅡ世）の祝福と国庫からの支度金を得て派遣されたものであったにも拘わらず、パーヴェルⅠ世はこの時、宣教団を庇護しなかった。経済活動を優先したのである[31]。バラノフが、シェリホフから現地支配人に抜擢されたのは、商人としての豊かな経験、並外れた才能と強い意志、当時と

25 Там же. С. 352.
26 Там же. С. 259.
27 Там же. Рис. 48.
28 Там же. С. 251.
29 Там же. С. 175.
30 Там же. С. 251–277.
31 Там же. С. 260–273.

しては充分な教育、勇敢な愛国者であることを買われたからであり[32]、人選にそれなりの理由はあった。（シェリホフは、1795 年に永眠している。）宣教活動から見れば、不条理な状況であり、宣教師たちには並々ならぬ忍耐が求められる時代であったと言える[33]。

2. 露米会社植民地時代の千島アイヌ民族の生活環境

露米会社が千島列島の開発に本格的に乗り出すのは、1828 年頃からである。1828 年夏、スロボッチコフを隊長とする千島列島部隊（ロシア人毛皮狩猟者 12 名、アリューシャン列島からラッコの狩猟のために連れてこられたアレウト人 49 名）がウルップ島に上陸し[34]、翌年新たに 24 名のアレウト人たちと 9 艘の新しいバイダルカ（筆者注：海獣の皮で作った小舟）がウルップ島に送り込まれた[35]。この最初の二年間において、毛皮の収獲量が上首尾であったことから、ノヴォ・アルハンゲリスクにある露米会社支社の支社長フェルディナンド・ヴランゲリは、千島列島部隊（Курильсикй отряд）を格上げして千島列島局（Курильский отдел）とし、最初の局長としてエピファノフを任命した[36]。1832 年、千島列島局長エピファノフが北千島を探索したところ、この地域の島々には多くの千島アイヌが居住していることが分かった。エピファノフは彼らを一か所に集め、千島列島が露米会社の管轄下に入ったこと、そのため彼らが毛皮を売ることができるのは露米会社のみであること、さらに、彼らからヤサークを取ることが禁止されたことを通達した[37]。

千島列島は、露米会社の他の植民地と同じように、露米会社支社（ノヴォ・アルハンゲリスク）の直轄地となった[38]。露米会社時代に千島列島の住民だった者は、先住民の千島アイヌ民族の他、露米会社のロシア人、毛皮狩猟のためにアリューシャン列島から連れてこられたアレウト人、ロシア人と先住民の混血（スヴェトラーナ・フョードロヴァにならい、本稿では「クレオール」と呼ぶ）[39] 等であった。ここで留意すべき点は、千島列島が露米会社の植民地となり、被雇用者としてアレウト人、クレオール等が列島の島々に居住することになっても、千島アイヌ民族の立場はあくまでも自由な立場の先住民であって、露米会社の被雇用者ではなかったという点である。露米会社は先住民との関係に関する規則を別

32 Там же. С. 159.

33 ロシア正教会及びアメリカ正教会において尊崇されている「アラスカの聖ゲルマン」は、この宣教団の一員であった。コディアク島の北東エロヴィ島で生涯を終えた。ヴァラアム修道院の修道士であった彼を偲んで、この地は「ノーヴィ・ヴァラアム（Новый Валаам）」と呼ばれるようになった。

34 *Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С. 18.

35 Там же. С. 25.

36 Там же. С. 40–41.

37 Там же. С. 42.

38 Там же. С. 37.

39 特にアラスカのクレオールはロシアの習慣や信仰に忠実で、彼らの中から多くの司祭、輔祭、教役者が輩出された。История Русской Америки. Т. 3. С. 152. アリューシャン列島からアメリカ北西部にかけての地域において形成されたクレオールの社会的問題については、フョードロヴァの論文に詳しい。*Федорова С.Г.* Русское население Аляски и Калифорнии. С. 186–195.

途定めており、シュービンはそれを「疑いなく先住民にとって有利なものだった」(40) としている。

1854 年、シュムシュ島に寄港したスクーナー船「ヴォストーク号」の船長ヴォイン・リムスキー＝コルサコフは当時の島の様子をつぎのように描写している。「千島列島の島々のクリル人（筆者注：千島アイヌ）たちも毛皮狩猟に携わり、露米会社の利益となっていた。主要な獲物はラッコで、千島列島海域のものは他のどこよりも良品であった。（中略）教会はよくできており、聖器物もたくさんあり、50 人が入ることができた。司祭の巡回がないときは、フォルスマン（筆者注：シュムシュ島の現地管理人）が信徒たちに代式祈祷を行なっていた。倉庫には毛皮狩猟者とクリル人に必要なありとあらゆる物品が蓄えられていた。衣服、靴、下着、斧、針、糸の他、お茶、砂糖、イヤリング、指輪まであった。これらの物品は毎年毛皮回収に来る露米会社の船で運ばれてくるのである。食糧備蓄は三年分ほどあった」(41)。

同時期にシュムシュ島に寄港した「バイカル号」の船長ニキータ・シャルィポフは「クリル人たちは、獲れたラッコの毛皮を一年に一回（筆者注：シュムシュ島へ）運んできて露米会社に売り、生活必需品を受け取っていく。彼らは全員正教徒である。露米会社の船がここに毛皮の回収のために寄港している」(42) と証言している。

これらの証言から、露米会社植民地時代の千島列島では、露米会社に毛皮を売ることによって、先住民である千島アイヌたちの生活も成り立っており、手に入る生活必需品の品揃えや食糧備蓄の状況から判断して、生活環境は整っていたと言える。

3. 千島アイヌ民族の所属教会

千島列島が露米会社の植民地になる前、千島列島の信徒島民はカムチャッカのボリシェレツク教会所属の信徒であった (43)。千島列島がノヴォ・アルハンゲリスクにある露米会社支社直属となったことを受け、当時千島列島を管轄していたイルクーツク教区宗務局は、以後の千島列島の教会的帰属について露米会社に問い合わせを行った。露米会社本社はノヴォ・アルハンゲリスクの支社長ヴランゲリに、イルクーツク教区宗務局からの問い合わせについて、つぎのように連絡している。

> 千島列島は、植民地として露米会社に所属するものであるから、教会についても、当社の植民地域内にある教会に所属するべきである。その場合、アトカ島が最寄りである。従って、当社は宗務局に、千島列島をアトカ島の聖ニコライ教会の所属とするよう依頼した。それに伴い、教会の祈祷を行う

40 *Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С. 42.

41 *Ермолаев А.Н.* Российско-американская компания в Сибири и на Дальнем Востоке (1799–1871 гг.). Кемерово, 2013. С. 572.

42 Там же. С. 574.

43 Письмо Главного правления РАК Ф.П. Врангелю о причислении населения Курильских островов к приходу Никольской церкви на о-ве Атха и предоставлении судна священнику для посещения островов // Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского севера, 1815–1841. М., 2005. С. 272.［http://www.kuriles-history.ru/doc_1815-1841/］(2023 年 8 月 28 日閲覧).

ために、千島列島へアトカ島から司祭が毎年巡回することを約した。そのようなわけで、本社は貴殿に件の司祭が毎年、または状況が許す範囲で、千島列島を巡回することができるよう、往復及び列島の諸島間の移動について特別に船を雇うことなく、オホーツクへ向かいアトカ島へ戻る露米会社の船で司祭を千島列島に送り届け、島々の巡回とアトカ島への帰航は千島列島所属の露米会社の船を手配することを要望する。方法については貴殿の裁量に任せるが、当社は貴殿ができるだけ早く司祭を千島列島に派遣することを期待する。さもないと、カムチャッカの長官と当地の司祭たちがこの件に関する露米会社の職務怠慢として必ず上に報告するであろう。それは別にしても、露米会社はこの任務を必ず遂行しなければならない[44]。

これを受けたヴランゲリの所見は次の通りである。「アトカ島の司祭及びアトカ島事務所に、毎年ではないにしても隔年は必ず（1834 年より）司祭が千島列島に立ち寄り、且つ戻れるように船を手配するよう伝えること」[45]（1833 年 3 月 31 日付）。こうして、1836 年に千島列島の島民はアトカ島の聖ニコライ教会所属の信徒となった。

シュービンに依れば、「1836 年 1 月 11 日、イルクーツクの大主教インノケンティ（筆者注：アレクサンドロフ）は千島列島をアトカの所属とすることを祝福し、以後数年間、アトカから司祭が稀に千島列島を巡回した」[46] とされる。「稀に」（изредка）とは実際にどの程度の頻度であったのか、本稿では第 6 節「千島列島への司祭巡回の状況」において、司祭巡回の状況を調査し、時系列で列記して、検証することを試みた。

宣教のために露米会社の船を使わせてもらえることは、ロシア正教会にとってコスト削減となった。一例として、後に「カムチャッカ教区」が形成された 1840 年から 1859 年の 19 年間について、インノケンティ（ヴェニアミノフ）のシノドへの報告によれば、露米会社は彼の教会巡回旅費総額 15,000 ルーブル余を彼に請求しなかったという[47]。

但し、1842 年以降、千島列島の島民はノヴォ・アルハンゲリスクの教会の所属となった[48]。

千島列島の島民信徒のメトリカ（教会簿冊）[49] は、その時々の所属教会の司祭によって管理されていたと考えられる。現在、このメトリカは、アメリカ議会図書館に保存されている可能性がある[50]。

44 Там же.

45 Там же.

46 *Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С. 46.（シュービンの別の論文（前注 7 参照）では、1836 年 1 月 2 日）

47 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 4. С. 477.

48 Там же. Т. 7. С. 393.

49 教会備え付けの帳面で三部（第一部洗礼、第二部婚配、第三部埋葬）から成っている。当該教会において行われたこれらの祈祷に関して、司祷した聖職者名、祈祷を受けた信徒名、祈祷が行われた年月日などを記すようになっている。

50 *Федорова С.Г.* Русское население Аляски и Калифорнии. С. 39–40.

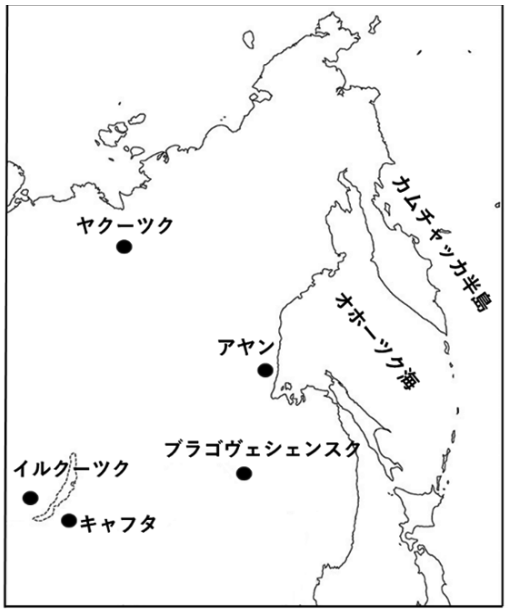


図 3.「カムチャッカ教区」関連の地図（筆者作成）

4.「カムチャッカ教区」と露米会社

1840 年にイルクーツク教区から独立した形で設立された「カムチャッカ教区」（本稿「はじめに」参照）の主教座（教区本部）は、当初ロシア領アメリカの主要都市ノヴォ・アルハンゲリスクにあったが、その後、1852–1853 年にオホーツク海に面するロシア大陸部の港町アヤン、1853–1858 年に東シベリアのヤクーツク、そして 1858 年にアムール河流域のブラゴヴェシェンスクへと移動した。

この教区がロシア正教会の伝統的な諸教区と決定的に異なる点は、住民の大部分が少数異族人だという点である。人口 25 万人のうち、正教徒が 22 万 5 千人、その内ロシア人は 1 万 2 千人であり、他はヤクート人、トゥングース人、カムチャダール人、アレウト人、コディアク人、クリル人などであった。この教区の主な使命は、ロシア領アメリカと列島部に居住するこれら少数異族人への宣教であった [(51)]。また、これらの人々が、ロシアとアメリカの二大陸にまたがる広大な面積に散在しているということも特異な点であった。

アレクセイ・エルモラエフは、上記の教会活動支援のための資金が、主にキャフタにおける中国との毛皮貿易によってもたらされる露米会社の利益から充当されていたことを明らかにしている。キャフタにおける中国との毛皮取引量は、多い時で露米会社の毛皮商品の 80 パーセントに及び、露米会社が現金を得ることができるほぼ唯一の交易として重要であった。キャフタにおいて毛皮を中国のお茶と交換し、そのお茶をロシア国内で販売することによって現金収入を得、それによって株の配当の支払いや、植民地での生活必需品の

51 Камчатская епархия.

購入、植民地内の教会活動支援を行ったのである[52]。ちなみに、教区が形成された1840年から1859年までの19年間で、露米会社が教区内の先住民族宣教のために支援した金額は、230,000ルーブルである[53]。

「カムチャッカ教区」には、当地域の状況を熟知する優れた宣教師インノケンティ（ヴェニアミノフ）が初代主教として選立され、宣教が新たな段階に進展した。

インノケンティ（ヴェニアミノフ）は、修道士になる前の名前をイオアン・ヴェニアミノフ（青年期までの姓はポポフ）と言い、1797年にイルクーツク管区ヴェルホレンスキー郡アンギンスコエ村で生まれた。イルクーツク神学セミナリーを卒業した後、結婚し、司祭となり、イルクーツクでの将来を嘱望されていたが、1823年、当時誰も手を上げるものがいなかったウナラシュカ島（アリューシャン列島中部に位置する）への宣教を自ら希望した[54]。

任地に到着すると彼はすぐにノヴォ・アルハンゲリスクの露米会社支社長マトヴェイ・ムラヴィヨフを訪問している。ムラヴィヨフは、新任の司祭についての印象をペテルブルク本社への報告書につぎのように記している。「この地域にとって、ヴェニアミノフ司祭ほどの高い精神性、豊富な知識、品格、清廉、職務熱心な人は望むべくもない」[55]。司祭イオアン・ヴェニアミノフは1824年より1834年までウナラシュカ島で10年間、後ノヴォ・アルハンゲリスクで1834年から1839年まで5年間、合計15年間司祭として宣教・牧会活動を行なっており、この地域のことを熟知している聖職者であった[56]。一例を挙げると、司祭イオアン・ヴェニアミノフの郷土研究書『ウナラシュカ局の島々の記（Записки об островах Уналашкинского отдела）』（1840年）について、露米会社支社長ヴランゲリは「正確な観察、的確な表現、多面的で詳細な描写」を高く評価している[57]。また、司祭イオアン・ヴェニアミノフは、ロシア科学アカデミーからデミドフ二等勲章を授与された『アレウト語文法（Грамматика алеутского языка）』[58]を執筆している。

妻の永眠（1939年）後、長司祭イオアン・ヴェニアミノフ（1939年、長司祭に昇叙）[59]は、1940年、サンクトペテルブルクにおいてインノケンティの修道名で剃髪式を受け、主

52 *Ермолаев А.Н.* Российско-американская компания в Сибири и на Дальнем Востоке. С. 286, 583.

53 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 4. С. 479.

54 Там же. Т.1–2. С. 27–29.

55 Там же. С. 30.

56 Там же. С. 34–35; там же. Т. 3. С. 54–55.

57 Там же. С. 18. また、この著書について、フョードロヴァはつぎのように評価している。「これは、アリューシャン列島及びアレクサンドル諸島の歴史、民俗、言語、鉱物、植物、動物に関する貴重な資料を含む多角的且つ本格的な研究である。I.E. ヴェニアミノフは、アリューシャン列島及びアラスカの先住民の間にロシア文化を拡げ、アレウト人やトリンギット人の物質的及び精神的文化にロシアの影響を与えて、著しく進歩させた」。*Федорова С.Г.* Русское население Аляски и Калифорнии. С. 23–24.

58 Там же. Т. 3. С. 65.

59 Там же. Т. 1–2. С. 39.

教に按手され、「カムチャッカ教区」初代主教インノケンティ（ヴェニアミノフ）としてノヴォ・アルハンゲリスクに戻った。彼が当教区の主教であった時代は、1840–1868 年（1850 年より大主教）[60] である。

主教になってからは、特に露米会社の植民地において宣教・牧会にあたっている司祭たちの規範として、「植民地の全司祭に関わる教会運営、対応、会計報告の規則（Правила относительно дел церковных, сношения и отчетности, касаю-щиеся всех вообще колониальных священников）」[61] を作成し、教会事務に関して実務的な指導を行なっているが、その中に、次のような文言がある。「諸教会の維持経費の殆どは露米会社の支援によるものであるから、要望の実現についても露米会社にかかっている。（中略）従って各教会の執事は（年一回）教会の財産目録を作成して署名し、管轄司祭の承諾を得たうえで露米会社の地域担当者に（情報や便宜のため）提出すること。また、併せて教会の修復などの要望を提出すること」。司祭たちが自分の立場を正しく理解し、露米会社に然るべき義務を果たすようにとの、主教としての配慮が感じられる。

また、インノケンティ（ヴェニアミノフ）主教は、司祭たちに向けて「異族人への教え、奉神礼及び交わりに関する特別な訓戒（Особенные на-ставления относительно учения, бого-служения и обхождения с инородцами）」[62] という 34 条からなる訓戒を残しており、それはつぎのような文言から始まっている。「信仰の教義及び作法に関する教えの根本はこれを堅く守り、これに反するいかなることも彼らに話すべきではなく、許すべきでもない。それによって爾が死に直面しようとも。しかし、新たに洗礼を受けたものは、信仰における赤子のようなものであるから、ある種の儀礼的な欠点への寛容は思慮すべきである。ひとつには風土的なものへの配慮から、もうひとつには、彼らの信仰生活が堅固なものとなることを待ち望む心からである」。他にも、異族人が語ることは注意深く、寛容に、忍耐をもって聴くべきこと、問いかけにはわかりやすく、優しく答えること、よほどのことがない限り新たに洗礼を受けた異族人に司祭のための用事を頼まないこと（洗礼を受けることが司祭の奴隷となることだと誤解されないために）、など異族人への宣教活動に携わる司祭を教導するものとして興味深い。

また、少数民族の言語における正字法及び文法の確立、聖書の翻訳、教導書の出版に関しては、インノケンティ（ヴェニアミノフ）は新約聖書「マトフェイニ因ル聖福音」をアレウト語に翻訳し[63]、ヤクーツクでは彼の監修の下、現地の司祭らから成る翻訳委員会が聖書（部分）、奉事経、聖事経、洗礼機密、痛悔機密、婚配機密などをヤクート語に翻訳した[64]。それに対して、千島アイヌ民族に関して聖書の翻訳などは行われなかった。それは、話者

60 Там же. С. 55.
61 Там же. Т. 3. С. 92–95.
62 Там же. С. 85–91.
63 Там же. Т. 1–2. С. 148–149.
64 Там же. С. 64–68.

人口が格段に少ないこと[65]、列島に言語生活を共にする常駐司祭がいなかったことが理由ではないかと推察する。

千島列島における信徒の共同体としての教会の形成について、インノケンティ（ヴェニアミノフ）は、司祭イアコフ・ニェツヴェトフがアトカ島の管轄から離れた後、1842 年から毎年ノヴォ・アルハンゲリスクより司祭を派遣することで教会の設立を試みたが[66]、ついに千島列島教会成立には至らなかった。

1858 年のアイグン条約締結の際、インノケンティ（ヴェニアミノフ）は東シベリア総督ムラヴィヨフが率いる外交団に参加した[67]。同年に主教座（教区本部）がブラゴヴェシェンスクに移転したのは、プリアムーリエ、プリモーリエ、満州、朝鮮への宣教を見据えたものである[68]。

若き日のインノケンティ（ヴェニアミノフ）が司祭としてウナラシュカ島に赴任してから（1824 年）、「カムチャッカ教区」が設立され、その主教となり、サンクトペテルブルクのシノドへの出張（1867 年）を経てモスクワへ転出するまで（1868 年）の期間は、本稿が扱う千島列島が露米会社の植民地だった時期とほぼ重なる。インノケンティは、配下の司祭たちを千島列島に派遣し、牧会に努め、また露米会社とも良好な協働関係を築いた。

但し、前述した「カムチャッカ教区」の主教座（教区本部）の移動（ロシア領アメリカの主要都市ノヴォ・アルハンゲリスクからロシアの大陸部アヤンへ）が行われた 1850 年前後には、露米会社との良好な関係を難しくするいくつかの状況が生まれた。自らはルター派であった露米会社支社長アドルフ・エトリン（フィンランド人）が、ロシア領アメリカで宣教しているロシア正教会の宣教団を縮小するよう露米会社理事会に働きかけたのである。当初インノケンティ（ヴェニアミノフ）自身は、エトリンの動きをあまり気にかけていなかったのだが、ノヴォ・アルハンゲリスクにロシア正教会の主教座が置かれた年に、当地にルター派の教会が建てられたのは、エトリンのイニシアチブによるものだった。やがて、露米会社は当地域にフィンランド人やドイツ人を多数送り込むようになり、プロテスタントの気風が蔓延し始めた。英国国教会はロシア領アメリカにおける宣教の機を伺い、当地におけるロシア正教会の動きを注視するようになった。また、インノケンティ（ヴェニアミノフ）が有能であったがために、この地域の宣教のみならず外交など多方面に影響力を及ぼしたことは、国家の代理人を任ずる露米会社との関係において不具合の種となった。主教がノヴォ・アルハンゲリスクに常駐する必要はなく、管区長クラスの司祭が常駐していればよいという

65「カムチャッカ教区」における諸少数異族人の中で最も人口が多かったのはヤクート人で、180,558 人、つぎがトゥングース人で、14,742 人、最も少ない人口がクリル人（千島アイヌ）で、72 人であった。Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 3. С. 512–513.

66 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 1–2. С. 49.

67 *Смирнова И.Ю.* Между Западом и Востоком: из истории церковно-дипломатических отношений на Ближнем и Дальнем Востоке. М., 2016. С. 393.

68 *Смирнова И.Ю.* Конфессиональный вектор внешней политики России: к истории взаимодействия МИДа и Св. Синода в XIX веке // Вестник Исторического Общества Санкт-Петербургской Духовной Акалемии. 2021. №3(8). С. 358.

雰囲気が、インノケンティ（ヴェニアミノフ）をノヴォ･アルハンゲリスクに居づらくした、とイリーナ・スミルノワは分析し、当地のロシア正教会保護のために、外国のプロテスタント教会に対してシノドと政府が然るべき対抗策を講じなかったと指摘している[69]。

1879 年 3 月 31 日（旧暦）、モスクワ及びコロムナの府主教としてインノケンティ（ヴェニアミノフ）は、モスクワにて永眠した（享年 81 歳）[70]。先に述べたように、1977 年にロシア正教会及びアメリカ正教会において「シベリア及びアメリカの使徒」として列聖されている。色丹島移住（1884 年）後の千島アイヌを牧した宣教師ニコライ（カサートキン）[71] は「クリル人は忘れえぬ大主教インノケンティ（ヴェニアミノフ）座下の信徒衆の一部であり、信仰の篤さの模範である」[72] と敬意を込めて想起している。

5. シュムシュ島の会堂

千島列島史を通して、当列島に会堂が建てられたのはシュムシュ島のマイロップ湾のみである。教会建築としては、至聖所の無い「会堂」（часовня）である。この会堂の具体的な位置については、明治時代に郡司成忠の報效義会が駐島した際の手描きの地図（「明治 36 年秋、報效村略図」[73]）に「ロシア寺院跡」として記録されている（描者不詳）。

シュムシュ島に会堂が建てられた経緯はシュービンの論文に拠れば、次のようなものである。

> イワン・クプレヤノフ（筆者注：露米会社ノヴォ・アルハンゲリスク支社長）は 1839 年、千島アイヌの要望で会堂建立のための木材を千島列島局に送った。それはノヴォ・アルハンゲリスクで集められたアメリカ産の松であった。1840 年、千島アイヌたちはシュムシュ島のマイロップ湾にある露米会社の居留地にその松で会堂を建てた。会堂の建築と成聖はアトカの司祭イアコフ・ニェツヴェトフが直接指導して行われた。それに至る 1837 年及び 1838 年、千島アイヌたちは将来の会堂建設のために進んで毛皮の寄進を行った。寄進された毛皮は 1837 年、オホーツクにて 260 ルーブルで売られ、1838 年、3875 ルーブル 55 コペイカで売られ、合計額は 4135 ルーブル 55 コペイカとなった。これらの献金は植民地の宗教部門の会計に組み入れられ、教区主教の管理下におかれた。この献金でシュムシュ島の会堂のためにイコンや聖器物が購入されたのである。会堂建立の二年後、千島アイヌたちは露米会社に新しい会堂のために常駐の司祭を送ってほしいと頼んだ。そして、常駐する司祭のために毎年ラッコの毛皮 8 枚及びその他の毛皮合計凡そ 600 ルーブルを献納することを約した。しかし、千島列島の信徒数が少ないことを理由に露米会社支社はこの要望を受け入れなかった[74]。

69 *Смирнова И.Ю.* Перенесение Камчатской, Курильской, Алеутской кафедры в Аян: pro и contra // Вестник Московского государственного лингвистического университета. 2018. Вып. 4(812). С. 152–164.

70 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 1–2. С. 82.

71 ロシア正教会日本宣教団長。

72 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』教文館、2007 年、第 4 巻、44 頁。

73 根室市歴史と自然の資料館所蔵。

74 *Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С. 52.

シュムシュ島の会堂について、シュービンは自身の別の論文[75]でも触れている。シュービンは「アトカ島の教会司祭イアコフ・ニェツヴェトフの日記　1828–1842年（Дневник священника церкви на о. Атха Иакова Нецветова за 1828–1842 гг.）」を出典としつつ、会堂建立に至った経緯について「1834年、司祭イアコフ・ニェツヴェトフがアトカ島から最初の千島列島巡回を行ったとき、シュムシュ島とパラムシル島において、アリューシャン列島から連れてこられている露米会社の使用人の中に、多くの知人がいることに気がついたのである[76]。このとき初めて、アレウト人たちの口から（筆者注：司祭に対して）、千島列島に自分たちの教会と司祭が欲しいという要望が出された」と記している[77]。

司祭イアコフ・ニェツヴェトフはアトカ島出身のクレオールで、イルクーツク神学校で学び、クレオールとして初めてロシア正教会の司祭になった人である[78]。会堂の成聖式には、シュムシュ島及びパラムシル島の居住者全員が参列して盛大に行われた。シュービンは「J. ニェツヴェトフによって北クリル列島に会堂が建てられたことは、この最果ての地におけるキリスト教化史上もっとも顕著なできごとであった。（中略）1844年、1848年、1855–1877年に関してこの教会の活動の記録が残っている。この間にクリル人の新しい世代が育っており、彼らは幼少期からキリスト教の基本を身につけたのである」[79]と記している。

ポロンスキーは、自著の中で、シュムシュ島に1756年に会堂が建てられ、1830年代も良い状態で残っていたと述べている。この会堂と本稿で論じた1840年建立の会堂との関係については、さらに検証が必要である[80]。

---

75 *Шубин В.О.* Миссионерская деятельность сподвижника И.Е. Вениаминова священника Якова Нецветова на Курильских островах. С. 153.

76 アトカ島（アリューシャン列島）の管轄司祭であったイアコフ・ニェツヴェトフの出自は、父親がロシア人、母親がアトカ島のアレウト人である。そのため、アリューシャン列島のアレウト人たちとは親交が深かったと考えられる。したがって、ここでは、ラッコ猟のためにアリューシャン列島から千島列島に連れてこられていたアレウト人たちの多くが、イアコフ・ニェツヴェトフの知り合いだったのであろう。

77 シュービンの論文の中には会堂名が見当たらないが、彼が出典としている司祭イアコフ・ニェツヴェトフの日記には、この会堂の名前が記されている可能性があると推察する。

78 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 1–2. С. 34.

79 *Шубин В.О.* Миссионерская деятельность сподвижника И.Е. Вениаминова священника Якова Нецветова на Курильских островах. С. 154.

80 *Полонский А.* Курилы. С. 19, 54. ポロンスキーは、会堂建立年について、19頁では1756年、54頁では1757年と記している。ポロンスキーに拠れば、18世紀中頃にシュムシュ島に立てられた聖ニコライ会堂は、1830年代も良好な状態で残っていた。一方、シュービンに拠れば、シュムシュ島に会堂を建設する要望が初めて出されたのは、1834年の司祭イアコフ・ニェツヴェトフによる千島列島巡回のときであった。そうだとすると、ポロンスキーが述べている聖ニコライ会堂はどうなったのかという疑問が生ずる。最初の会堂が良好な状態で残っているところへ、さらにもう一つ会堂が建てられたとは考え難い。ポロンスキーに拠る会堂を初代会堂、シュービンに拠る会堂を二代目会堂とする仮説を立てたとしても、この二つの会堂の存在の関係が不明である。シュービンの論文では、ポロンスキーが述べている会堂について言及されていない。

6. 千島列島への司祭巡回の状況

千島列島島民の所属教会がカムチャッカからアトカ島に変更されたことに伴い（本稿第３節参照）、1833 年、イルクーツク教区はカムチャッカの司祭に対して、教会巡回の目的で千島列島に渡航することを禁じた[81]。従って、1834 年からはカムチャッカの司祭に代わって、アトカ島の司祭が千島列島を巡回している。また、1842 年からは、千島列島の所属がアトカ島からノヴォ・アルハンゲリスクに変更になったため、ノヴォ・アルハンゲリスクの司祭が千島列島を巡回している。これらの巡回の詳細を以下の表のような形で明らかにした。表の中では、司祭名の他に、情報がある場合には、司祭の所属、訪問した島名、手記からの引用などを併せて記した（船の遭難など不慮の事由での寄港滞在も含む）。

千島列島を訪れた司祭たち（1833 ～ 1865 年）		
整理番号	とき	司祭名（所属、訪問した島名、手記からの引用、備考）
1）	1833 年	司祭アレクセイ・チェルヌィフ[82]（カムチャッカのボリシェレツクより公式に巡回した最後の司祭）
2）	1834 年 6 月	司祭イアコフ・ニェツヴェトフ[83]（アトカ島の司祭、隔年で千島列島を巡回するよう指示が出された）[84]
3）	1835 年	司祭 A. チェルヌィフ[85]（1833 年に千島列島へのカムチャッカからの牧会渡航は禁止されたにもかかわらず、パラムシル島へ渡航している）
4）	1838 年 5 月	司祭イアコフ・ニェツヴェトフ[86]
5）	1839 年 6 月	司祭イアコフ・ニェツヴェトフ[87]
6）	1840 年	司祭イアコフ・ニェツヴェトフ[88]
7）	1841 年	司祭名不詳[89]（インノケンティ（ヴェニアミノフ）主教がオホーツクからノヴォ・アルハンゲリスクに航行した際、同行した修道司祭がシムシル島を巡回）

81　1833 年 1 月 19 日付のイルクーツク教区宗務局からの通達により、カムチャッカの司祭は「今後千島列島への入域を禁じられる」こととなった。*Осипова М.В.* Христианизация айнов как способ распространения российского влияния на Курильских островах // Вестник ДВО РАН. 2012. №1. С. 19. イルクーツク教区の主教が、千島列島の島民をアトカ島の聖ニコライ教会所属として祝福した日付が 1836 年 1 月 11 日なので、3 年の空白があるように見えるが、現地では、上記の表で見るように、1834 年からアトカ島の司祭による巡回が始まっている。

82　*Осипова М.В.* Христианизация айнов как способ распространения российского влияния на Курильских островах. С. 19.

83　*Шубин В.О.* Миссионерская деятельность сподвижника И.Е. Вениаминова священника Якова Нецветова на Курильских островах. С. 153.

84　*Осипова М.В.* Христианизация айнов как способ распространения российского влияния на Курильских островах. С. 20.

85　*Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С. 48.

86　*Шубин В.О.* Миссионерская деятельность сподвижника И.Е. Вениаминова священника Якова Нецветова на Курильских островах. С. 153.

87　Там же. С. 154.

88　Там же.

89　Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем.

8）	1842 年夏	司祭名不詳[90]（インノケンティ（ヴェニアミノフ）主教は、ノヴォ・アルハンゲリスクよりシュムシュ島へ司祭（1841 年とは別の司祭）を派遣（この司祭による巡回報告を主教はつぎのようにメモしている[91]。①（筆者注：1840 年に建てられた）会堂はしっかり建っており、内部も然るべく飾られており、立派である。東側に至聖所を増築中である。②千島アイヌは一人残らず進んで痛悔機密に与り、司祭の説教を大変注意深く、また感謝して聴いた。司祭が会堂で行う祈祷に毎回参祷し、特に聖体礼儀には喜んで熱心に通った。シュムシュ島に居住している現地管理人は千島アイヌたちがいつもすすんで会堂に通い、一生懸命祈っていると証言した。③千島アイヌたちは千島列島に教会と司祭をおいて欲しいと希望しており、司祭常駐費用として毎年いくらかの毛皮を献納すると言っている。この件について私（筆者注：インノケンティ主教）は、（筆者注：滞在中の）カムチャッカから露米会社支社長に手紙を書き、彼の意見を尋ねた。そろそろ返事が来るはずだ[92]。④ 1842 年まで千島列島を管轄していたアトカの司祭、及び 1832 年まで千島列島を管轄していたカムチャッカの司祭たちのうちの数人が口をそろえて言うには、千島アイヌは温和で、従順で、平和的で、誠実で、献身的な民族であり、大変敬虔であり、信仰に熱心である。そしてアトカの司祭が言うには、善良なることにおいてアトカのアレウト人に少しも劣らないと）
9）	1846 年	司祭ニキタ･オモフォールスキー[93]（ブリック船「トゥングース」に乗って来島し、ウルップ島で材木と帆布を用いて至聖所の無い臨時祈祷所を建て、祈祷を行なった）
10）	1849 年	司祭ニキタ・オモフォールスキー[94]（インノケンティ（ヴェニアミノフ）主教が派遣し、シュムシュ島を巡回）
11）	1850–1851 年	修道司祭セルギイと同行の教役者 1 名[95]（島名不詳。インノケンティ（ヴェニアミノフ）大主教が派遣し、千島列島で越年。湖での大聖水式にて奇蹟の報告あり）[96]

T. 7. C.393; там же. T. 3. C. 124, 140–141.

90 Там же. T. 7. C. 393.

91 Там же. C. 393.

92 本稿第 5 節「シュムシュ島の会堂」において、「千島列島の信徒数が少ないことを理由に露米会社支社はこの要望を受け入れなかった」と記されている件。

93 *Ермолаев А.Н.* Российско-американская компания в Сибири и на Дальнем Востоке. С. 571.

94 *Осипова М.В.* Христианизация айнов как способ распространения российского влияния на Курильских островах. С. 20.

95 Святитель Иннокентий Московский, просветитель Америки и Сибири, Собрание сочинений и писем. Т. 3. С. 454–455.

96 Там же.

12）	1857 年	修道司祭アレファ[97]（インノケンティ（ヴェニアミノフ）大主教が派遣し、パラムシル島を巡回）
13）	1858 年	修道司祭アレファ[98]（インノケンティ（ヴェニアミノフ）大主教が派遣し、パラムシル島とシュムシュ島を巡回。修道司祭アレファの巡回報告には、つぎのように記されている[99]。（筆者注：長文のため、抜粋に留める）。（筆者注：島名不詳）特別な理由なく祈祷に参列しない者は誰もいなかった。祈祷の間、彼らは微動だにせず、話もせず、正確に十字を描いて敬虔に祈っていた。私はできるだけ分かり易いテーマで説教をし、彼らは注意深く聴いていた。なんらかの言葉がはっきりと理解できたときは、それが彼らの顔に表れるのであった。大斎のときは、男性は前方で、女性は後方で、きちんとそろって伏拝を行った。受難週間に奉神礼規則で定められている四福音書の長い誦経も途中で飽きるようなことはなかった。多くの者が基本的な祈祷文を暗記していたが、残念ながら正確ではなく、意味がわかっているのかどうか。（筆者注：パラムシル島において）復活大祭には全員が参祷し、聖体拝領に与ることができた。光明週間は毎日の祈祷の後、全員で順番に各家を訪れて、復活祭の喜びを分かち合った。彼らのご馳走はお茶、海獣や鳥の肉を煮たもの、根菜の油炒めやベリー類と一緒に似たものであるが、今年はその多くが無かった。しかし、光明週間の日々、この辺境の島において、正教における最高の喜びが朗々と響き渡った。「ハリストス復活！」と）
14）	1865 年	司祭ワシリイ・シャバリン[100]（露米会社の「ニコライ一世号」が遭難した結果、6 月から 8 月までシュムシュ島に住んだ）

（研究文献や史料から筆者作成）

実際には、まだ調査できていない諸資料の中に他の巡回についての記録がある可能性がある[101]。しかし、これ以下ではないことは証明される。つまり、32 年間に少なくとも 14 回、司祭が千島列島を訪れていたということになる。

97 Там же. Т. 4. С. 403.

98 Там же.

99 *Барсуков И.* Иннокентий Митролит московский и коломенский по его сочинениям, письмам и разсказам современников. С. 434–438.

100 *Ермолаев А.Н.* Российско-американская компания в Сибири и на Дальнем Востоке. С. 577–578.

101 齋藤東吉による「千島傳道の顛末」『正教新報』第 637 号、1907 年、15–17 頁、及び「日本最古の正教島（千島列島）」『正教時報』第 25 巻 4 号、1936 年、18–20 頁に古老の談話などを元にした千島列島巡回司祭名が若干記されているが、検証を要する内容であることから、本稿では出典としなかった。

イワン・バルスコフが著したインノケンティ（ヴェニアミノフ）の伝記に登場する 1858 年にシュムシュ島を巡回した司祭については [102]、名前が記されていないため、後世の諸論文及び刊行物において様々な解釈がなされているが [103]、当該伝記に「1858 年に二度目の派遣となった」と記されていることから、この司祭は上記 12)、13）の修道司祭アレファであることが今回の調査により明らかとなった。1860 年代の巡回実績は、遭難による一例以外は見つけられなかった。1860 年代になると露米会社の議事録の中に千島列島の名を見ることはほぼ皆無となった [104]。

1867 年 3 月にアリューシャン列島とロシア領アメリカがアメリカ合衆国に売却されたことにより、露米会社は主要な海域を失い、残されたのは千島列島及びコマンドール諸島の海域だけであった [105]。露米会社は事業の継続を断念し、1868 年、局長、管理人、航海士、書記は千島列島から全員引き上げた。島に残ったのは 200 人ほどの島民で、半数が先住民の千島アイヌ、あとの半数がアリューシャン列島から連れてこられたアレウト人等であった。同年、千島列島は沿海州知事の行政部門に引き渡された。しかし、驚くべきことに「クリル諸島において露米会社の活動が停止してからペテルブルク条約により領土が日本に譲渡されるまでの一時期（1867–1875 年）は、（中略）いかなる行政機関も自治機関も現地に設けられることがなかった」[106] のである。また、「この期間全体を通じて、何か職務を帯びた役人がクリル諸島を訪問することは誰ひとりなかった」[107]。また、「司祭にも忘れられた」[108]。露米会社を失った千島列島においては、「最も華やかで躍動的な」ひとつの時代が終わったのである。

一方、露米会社の植民地領域全域規模で見た場合、1860 年代初頭も教勢は総体的に発展している。一例を挙げれば、植民地領域において 1840 年に 4 であった教会数は [109]、1860 年には 7（ノヴォ・アルハンゲリスクに 2、コディアク島、ウナラシュカ島、アトカ島、ケナイ宣教団、ヌシャガク宣教団に各 1)、会堂数（いずれかの教会に所属するもの）35、神品数 11、教役者数 16 に増えている [110]。ロシアがアリューシャン列島及びロシア領アメリカを手放した後も、ロシア正教会では大主教インノケンティ（ヴェニアミノフ）等の活動により、在アメリカ教区（1870 年よりサンフランシスコに主教座を置くロシア正教会アレウト・ア

102 *Барсуков И.* Иннокентий Митрополит Московский и Коломенский по его сочинениям, письмам и разсказам современников. С. 434–438.

103 *Осипова М.В.* Христианизация айнов как способ распространения российского влияния на Курильских островах. С. 20;『釧路正教会百年の歩み』釧路正教会百年史委員会、1992 年、8 頁；ザヨンツ・マウゴジャータ『千島アイヌの軌跡』草風館、2009 年、38 頁。

104 *Шубин В.О.* История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. С. 55.

105 *Ермолаев А.Н.* Российско-американская компания в Сибири и на Дальнем Востоке. С. 578.

106 ヴァレーリー・シュービン（醍醐龍馬、兎内勇津流共訳）「1867 年から 1877 年にかけてのクリル諸島」32 頁。

107 同上。

108 ザヨンツ・マウゴジャータ『千島アイヌの軌跡』70 頁。但し、「忘れられた」のか、或いは、諸般の事情により恰も忘れられたような状態になったのかは検証する必要がある。

109 注 9 を参照。

110 Там же.

ラスカ教区）を設立することによって、アリューシャン列島及びロシア領アメリカにおける旧植民地領域の諸教会を失うことなく、存続させることができた[111]。

おわりに

露米会社の植民地時代、ロシア正教会による千島アイヌへの宣教の状況はどのようなものであったのか、という問いに答えるべく調査を進めてきた過程で見えてきたものは、当時の東シベリア、カムチャッカ、千島列島、アリューシャン列島、ロシア領アメリカという地域の特殊性、及びアジアとアメリカに国境を接するロシア領土の新天地としての一体性であった。この地域は、半官半民の露米会社をはじめとする毛皮狩猟交易に携わっていた商人たち、シベリアからリクルートされてきたロシア人毛皮狩猟者たち、現地の先住民族である諸少数異族人、彼らへの宣教を繰り広げたロシア正教会、この海域の港や船舶の航行を司っていたロシア海軍らから成る先例のない広大な地域社会であった。

今回の調査で明らかになったように、千島列島には島民信徒の教会組織（приход）が存在しなかったにもかかわらず、アトカ島やノヴォ・アルハンゲリスクからの司祭の巡回から漏れなかったのは、千島列島が露米会社植民地としてこの広大な地域社会に一隅を得ていたからである。生活面では、露米会社の被雇用者ではなかった千島アイヌも、露米会社に毛皮を売ることによって、植民地経営の保護に与ることができた。

千島列島が露米会社の植民地であった時期は、インノケンティ（ヴェニアミノフ）が「カムチャッカ教区」の主教（後に大主教）であった時期とほぼ重なり、教区と露米会社は基本的に良好な協働関係にあった。宣教資金の支援、船便のやりくり、司祭の派遣、教会の修復に至るまで教区と露米会社は緊密に連携をとりながら宣教活動を行っており、活動資金の大部分は、露米会社がキャフタでの毛皮交易で得た利益の一部で賄われていた。このように露米会社が教区の植民地領域において宣教を支援するという経営理念については、18世紀 80 年代にアリューシャン列島とロシア領アメリカで毛皮狩猟業を営んでいたシェリホフ＝ゴリコフ会社の経営理念を受け継いだものである。この点については、本稿第 1 節「露米会社設立以前の宣教の概況」で見た通りである。

今回の調査の過程で見えたもう一つの点は、千島アイヌ民族宣教の特異性である。自然の厳しい北洋の島々を小さなボートを操り、海獣を追って島から島へ移動し、定住しないというライフスタイルの民族へ宣教を行い、牧会するという例はロシア正教会史において他に類を見ない。オホーツク海、千島列島海域、アリューシャン列島海域で聖職者が遭難することは珍しくなかった。当該地域の宣教は、聖職者たちの自己犠牲を厭わない使命感によるものでもあった。その後の「カムチャッカ教区」の教勢もまた、それに先行する探検隊や商人ら民間人、地域の教会の司祭、シノドが派遣した宣教団の苦難の上に成り立ったものである。

111　*Смирнова И.Ю.* Между Западом и Востоком: из истории церковно-дипломатических отношений на Ближнем и Дальнем Востоке. С. 518–541.

Миссионерская деятельность Русской Православной Церкви среди курильских айнов: колониальный период Российско-Американской компанией

Ямазаки Хитоми

Историю православной миссионерской и пастырской деятельности среди курильских айнов можно разделить на две части. Первая — северокурильский период, когда они были подданными России, а вторая — шикотанский период, когда они перешли в японское подданство после Петербургского договора 1875 г.

В статье рассматривается, как проводилась миссионерская и пастырская деятельность Русской Православной Церкви среди курильских айнов в колониальный период Российско-Американской компании (РАК) на Курильских островах (1831–1867 гг.). (Курильский отдел образовался в 1831 г. и острова являлись колониальной территорией до роспуска РАК в 1867 г.).

В статье в 1-ом разделе изучается распространение христианства на Тихоокеанском Севере до основания колоний РАК, а именно политика управления компании Шелихова-Голикова, по которой промышленники и купцы распространяли христианство среди местных аборигенов, чтобы быстрее найти общий язык с новообращенными единоверцами с целью закрепления своего господствующего положения в этих регионах. (Такая идея была укоренена в акте Соединенной Американской Компании, а затем и в уставе Российско-Американской компании, активно участвовавшей в помощи Камчатской епархии).

Во 2-ом разделе описывается статус и положение курильских айнов в колониальный период.

В 3-ем разделе выясняется отнесение к приходу верующих островитян, поскольку в течение всей истории миссионерской деятельности на Курильских островах никогда не создавался приход (в связи с малочисленностью народа). Сначала они принадлежали Большерецкой церкви (Камчатка), а после основания Курильского отдела, в колониальном статусе, их перевели в Никольскую церковь на о. Атка (Алеутские острова). В 1834 г. первый раз посещает острова атхинский священник Иаков Нецветов (первый православный священник из среды креолов, канонизирован в 1994 г. Православной Церковью в Америке, как просветитель народов Аляски). С 1842 г. курильские айны принадлежали к церкви в Ситке, и оттуда священники посещали их.

В 4-ом разделе рассказывается о часовне, построенной в 1840 г. пожертвованиями курильских айнов на о. Шумшу, и освященной свящ. Иаковым Нецветовым.

В 5-ом разделе рассматриваются отношения Камчатской епархии с Российско-Американской компанией и деятельность первого архиерея Иннокентия (Вениаминова) (В 1977 г. канонизирован Русской Православной Церковью и Православной Церковью в Америке, как апостол Сибири и Америки).

В 6-ом разделе представляются хронологические данные посещений священнослужителями Курильских островов. По этим данным можно сказать, что

с 1833 г. по 1865 г., в течение 32 лет, священники посещали островитян и молились с ними не меньше 14 раз. После уступки Русской Америки Соединенным Штатам, в 1870 г. была учреждена в Сан-Франциско Алеутско-Аляскинская епархия Русской Православной Церкви.

Камчатская епархия в колониальных территориях РАК на Тихоокеанском Севере занималась христианизацией аборигенов с 1840 г. по 1870 г., в течение 30 лет. Благодаря тому, что Курильские острова были частью колониальной системы, курильские айны могли находиться под духовным попечением миссионеров, деятельность которых поддерживала Российско-Американская компания финансовыми средствами.